

【天気予報及び概況】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	降水量 (mm)
2023年	26.0	30.6	22.5	45.0
2022年	24.7	29.1	21.3	371.0
2021年	23.9	27.9	20.7	188.0
1991~2020年	24.1	28.1	20.7	232.5

※気温については、1ヶ月の平均値(気象庁)

【作物】

1 水管理

これからの管理で、最も重要なのが水管理です。根の活力維持に努め、品質の向上に努めましょう。

(1) 出穂期～出穂期以降

浅水管理(2～3cm)をします。異常高温が続くような時は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。

(2) 登熟期

灌水して土壌に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度(飽水状態)にします。

(3) 落水期

落水期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壌水分を保ちます。

2 病虫害防除

(1) 斑点米カメムシ類の発生は、平年に比べて広範囲でやや多いと予想されていますので、出穂期と傾穂期の2回防除をしてください。

スタークル顆粒水溶剤 2,000倍(収穫7日前まで)を使用する場合は、出穂後10～15日頃に散布してください。多発時には、1回目防除の7～10日後(傾穂期)に追加防除をしてください。

スタークル粒剤 3kg/10a(収穫7日前まで)を使用する場合は、出穂後7～10日頃に散布してください。多発時には、1回目防除の7～10日後(傾穂期)に追加防除をしてください。

スタークル剤はウンカ類、ツマグロヨコバイにも有効です。

(2) いもち病が発生している場合は、速やかにブラシフロアブル1,000倍(収穫7日前まで)で応急防除をしてください。

3 収穫準備

コンバイン、乾燥機等の点検を実施して、計画的な作業を行ってください。

【品種別収穫適期基準】

区分	短期あきたこまち	ヒノヒカリ
出穂後積算温度(°C)	900～1,050	900～1,100
最長稈黄変率(%)	85	85
出穂後日数(日)	33～37	40～46

<桐野>

【野菜】

1 主な秋まき野菜の作型(めやす)

作物名	植付け時期	収穫時期	品種
白菜	9月中旬	12月上旬	黄ごころ75
	9月中下旬	12月下旬	黄ごころ80
ブロッコリー	9月中旬	12月上中旬	おはよう
大根	9月上旬	11月中旬	耐病総太り
チンゲンサイ	9月下旬	12月上旬	青帝

収穫時期は栽培条件や天候により、収穫時期が変わります。

2 秋まき野菜の栽培上の注意点

- 秋まき野菜の重要害虫であるハスモンヨトウ、アブラムシを効率的に防除するために、育苗後半～定植までに薬剤処理を行います。
- 植付け後、残暑が続く場合、土壌を乾燥させないように注意してください。

3 播種

- 白菜、ブロッコリー、チンゲンサイ等を育苗する場合、128穴のプラグトレイに専用培土を入れ、1穴に種1粒を播種します。プラグ苗は管理が簡単で、植付けも容易にできます。畑への植付けは、本葉3枚程度の頃に行います。
- 畑に直接播種する場合、まき床を均平にします。播種後は十分灌水します。

間引きは本葉2～3枚の頃に、病虫害被害のもの、生育が極端に遅いもの、または早いものを間引きます。 <土居>

【栗】

1 収穫

今月の中旬には早生種の日向・丹沢、中旬からは国見・大峰、下旬からは筑波・銀寄・石鎚の収穫が始まります。収穫前に、園内の草刈を行い、樹冠下をきれいにしておきます。

栗の果実は非常に傷みやすく、特に高温にさらされると腐敗が多くなります。収穫は果実温が低い早朝から実施し、午前10時頃までには終わるようにします。

2 病虫害防除

中晩生種は、モモノゴマダラノメイガの産卵が9月上旬頃まで続くので、この時期にもう一度、エルサン乳剤1,000倍(収穫14日前まで)で防除します。

3 台風対策

台風で落穂しても、穂から果実が見えている状態であれば出荷可能です。台風後速やかに出荷可能な果実を集めます。ただし未熟果が混ざらないようにしてください。 <可部>

【シキミ】

秋芽伸長期です。新芽に被害を出さないよう適期防除してください。炭そ病にはペンコゼブ水和剤600倍、アブラムシ類・グンバイムシ類にはスミチオン乳剤1,000倍、サビダニ類にはピラニカEW 1,000倍を散布します。



ハマキムシの被害葉(2～3枚綴る)



幼虫(食害)

<佐津間>

【茶】

1 秋肥2回目の施用(9月中旬頃)

1回目の秋肥施用から2週間ぐらいたってから、えひめ茶有機100を8袋/10a、またはえひめ茶有機グリーン1号を5袋/10a施用し、中耕して土と混和します。

2 山草の敷き込み(9月下旬頃)

除草後、山草等を敷草することで、雑草抑制や土壌水分保持に役立ちます。土づくりのためにも有効です。

3 立枯株の剪除(9月上旬頃)

立枯株がはっきりしてくる時期です。早めに台切りして、周囲からの株張りを待つか、補植を行います。 <中田>